大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ピエール・ボエスチュオー研究（４）bis『ケリドニウス・チグリヌスの物語』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006015

論　文

ピエール・ボエスチュオー研究
（４）bis『ケリドニウス・チグリヌスの物語』

鍛　治　義　弘

拙前論文[1]では『ケリドニウス・チグリヌスの物語』の研究のいわば準備作業として、1556年版と1559年版の本文の比較を行い、特に大きな違いである第７章における付加について検討した。今回の論文ではこの作品の構成や、そこに表現されたボエスチュオーの考えを考察する。しかしこうした考察を進めるに当っては、この作品が、ボエスチュオー自身も認めるように、ある作品の翻訳であることに留意しなければならない。すでに拙前論文で示したように、この作品は単なる、あるいは忠実な翻訳とはとても言えないからである。

ボエスチューが「翻訳」したのは、H.Tudor[2]が指摘するように、Iodocus Clichtoueus ヨドクス・クリクトウェウス[3]の *De regis officio opusculum*『王の務めについての小品』なる著作である。チューダーはこの貴重な発見を発表した論文で、ボエスチュオーの作品とクリクトウェウスの原典とを比較対照して、短い考察を付しているが、いかにも簡略であり、クリクトウェウスの作品の出典の指示もないので、私たちはまずより具体的に「翻訳」の実際を検討した後、ボエスチュオーが自らの「発想」とする章を分析し、これらを総合して、『ケリドニウス・チグリヌスの物語』の構成や、ボオエスチュオーの考え、書き方を検討することになろう。

クリクトウェウスの『王の務めについての小品』は1519年にパリのアンリ・エチエンヌ書店から出版された作品で、全20章からなる。この作品とボエスチュオーの『ケリドニウス・チグリヌスの物語』との対応を、チューダーの指摘をもとに、一覧にして示せば次のようになろう。

『王の務めについての小品』	『ケリドニウス・チグリヌスの物語』
献呈の書簡	
序文	＿＿＿＿＿＿＿＿ 序文
	訳者の序文
Ⅰ．王の権力の痕跡	＿＿＿＿＿＿＿＿ 1

[1] 鍛治義弘、「ピエール・ボエスチュオー研究（４）『ケリドニウス・チグリヌスの物語』」、大阪府立大学紀要、人文・社会科学、第６５巻、２０１７、１－１４頁

[2] H. Tudor, <<*L'Institution des Princes chrestiens* : A Note on Baistuau and Clichtove>>, in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, T.XLV (1983), pp.103-106.

[3] 拙前論文では、フランドル出身で、主にパリで活動したこの人物をフランス語でジョス・クリクトーヴェと表示したが、フランス語での発音が確定していないようなので、今論文ではラテン語で表記する。

Ⅱ．王の古さ ――――――――――――――――――――2
Ⅲ．王の権力の威厳と尊厳 －－－－－－－－－－3
Ⅳ．徳で勝る －－－－－－－－－－－－－－－－－4
Ⅴ．法に従う ――――――――――――――――――――5
Ⅵ．経験、学識の必要 －－－－－－－－－－－－6
Ⅶ．神への尊敬 教会の守護 －－－－－－－－－7
Ⅷ．高慢を避ける －－－－－－－－－－－－－－－8
Ⅸ．謙虚であること
Ⅹ．温順と寛仁 ……9
ⅩⅠ．愛想のよいこと
ⅩⅡ．真理を愛する
ⅩⅢ．正義、公正 …… 10
ⅩⅣ．公正侵害の罰
ⅩⅤ．独裁を避ける ……11
ⅩⅥ．平和 ……12
ⅩⅦ．節制
ⅩⅧ．情欲を避ける ……13
ⅩⅨ．無為を避ける
ⅩⅩ．気前のよさ

いずれもチューダーの指摘により、実線はほぼ直接的な訳を、破線はかなりの省略や付加のある訳を、点線は同じ主題を扱うが内容が異なるものを示す。線を付していないものは両書間に対応するものがない。『王の務めについての小品』に付した章題は、内容のごく概略的な要約である。この区別を基に、原典とボエスチュオーの書の対応の諸相を、代表的な章ごとに検討しよう。

まずは忠実な翻訳とされている第１章を取り上げる。クリクトウェウスはこの始まりの章で、アリストテレスの『政治学』第３巻第７章における王政の定義を挙げた後[4]、王が地上における神の代理であるとし、自然に刻まれた王の権威を、例によって論証する。すなわち宇宙では太陽に、動物界では、プリニウスやアンブロシウスの証言する蜜蜂の集団に、また「箴言」の言う蟻の振舞いに、さらにヒエロニュムスやアンブロシウスの語る鶴の行動に、一なる指導者の

[4] << REgnum diffinit Aristoteles in tertio libro Politicorum : vinus esse in republica aut regione potestatem / non suum sed subditorum bonum quaerentis. >> Iodocus Clichtoueus, *De regis officio opusculum*, Parisiis, Ex officina Henrici Strephani, 1519, f. 6r°. オーストリア国立図書館蔵で google 上で公開されている電子テクストによる。本論文での同書への言及、引用はこの版により、以下では葉番号のみを付す。「アリストテレスは『政治論』第三巻で王政を定義する。国家あるいは地方で唯一つの権力で、自分ではなく臣下の善を求めるものである、と。」Cf.「ところで、単独支配制のうち、共通の利益に目を向ける国政をわれわれは一般に「王政」と呼んでいる」（『アリストテレス全集　17』、神崎、相澤、瀬口訳、岩波書店、1018、148 頁）

存在を見て取る。ボエスチュオーは、この論の展開に従い、同じ例を挙げており、その意味では忠実な翻訳と言えないこともない。しかし蜜蜂の例として挙げられたウェルギリウスの『農耕詩』第四巻からの引用は省略され、また幾つかの箇所で、かなりの分量の付加を行っている。つまり、太陽に続く部分では四大での火、四方での東、五地帯での温帯、三地域でのアジア、金属での金、鳥での鷲、魚での海豚、動物での獅子などの例を付け加えている。ただこれらの例の付加は、主張、論の展開には影響せず、例証による論拠をより強めるだけであるので、第１章をほぼ忠実な翻訳とするチューダーの主張はおおよそ首肯できるものである。

次に原典からかなり離れた箇所のある場合として、第３章と第８章を見てみよう。『王の務めについての小品』の第Ⅲ章では、第Ⅱ章に挙げた王政の四つの理由に続いて第五の理由を単一に求め、貴族制、民主制については名前を挙げるだけで、ほぼ触れず、自然に単一の表れを見て、その後王の権威の困難さを指摘し、初めは善いが終りの悪い王と、稀な良き君主の例をあげ、善き者の記憶は不滅で神と人間に記されるとして、第Ⅳ章以下の善き王たる務めへと繋いでいる。ボエスチュオーもクリクトウェウスのこの構成に従っているが、王政に対して貴族制、民主制が古来国政のあり方として論争になってきたとして、三政体を比較する。貴族制、民主制[5]を定義した後、それぞれの欠点を指摘する。貴族制については、次のように述べる。

<<il y a tousiours entr'eux ires, emulations, ambitions, monopoles, seditions, auec une enuie secrete, à qui sera preferé, & obtiendra le plus hault degrés d'honneur : ce qui causé plusieurs factions, & partilaitez parmy le peuple, tellement que plusieurs Republiques en ont esté ruinées,>>[6]

つまり貴族制は支配者の競争などにより分派を生み、滅ぶと言うのである。

民主制については、支配者たる民衆の本性が問題とされる。

<<le peuple estoit vn monstre cruel, furieux, paresseux, muable, incertain, fraudulent, prompt à ire, prompt à louer, ou mespriser, sans prouidence, ou discretion. >> (f. 16 r°)

このように民衆は変りやすく、不安定で、それが証拠として、正しくありながら民衆に追放された者として、デモステネス、ソクラテス、ハンニバルなど、古代の例を挙げる。

こうして二つの政体の欠陥を述べた上で、ボエスチュオーは次のように結論する。

<<il nous reste maintenant de conclure auec Platon, Aristote, Apolonius, sainct Hierosme,

---

[5] アリストテレスは共通の利益を目的とする正しい政体を支配者の数により王政、貴族制、共和制と分類し、そこから逸脱したものとして僭主制、寡頭制、民主制をあげる（『政治学』、前掲邦訳、109 頁）が、クリクトウェウスにもボエスチュオーにもこうした厳密な区別があるとは考えられないので、<<democratie>>を「民主制」と訳することにする。

[6] L'HISTOIRE / DE CHELIDONIVS / TIGVRINVS SVR L'INSTI- / tution des Princes Chrestiens, & origine / des Royaumes, traduite de Latin en Fran- / çoys, Par Pierre Bouaistuau, surnommé / Launay, natif de Bretaigne. / [...]/ A PARIS. / Pour Vincent Sertenas, demourant en la rue neuue nostre Dame, / à l'enseigne S. Ian l'Euangeliste: Et en sa boutique au Palais, / en la gallerie par ou lon va à la Chancellerie. / 1559. / AVEC PRIVILEGE. f. 15 r°. アルスナル図書館蔵でフランス国立図書館 gallica 上で公開されている電子テクストによる。以下この書への言及、引用はこの版により、葉番号あるいは折丁記号のみを付す。

sainct Cyprien, & plusieurs autres, que la monarchie, qui est le gouuernement qui se fait par vn Roy, est la plus excellente, la mieux approuuée & receuë de tous.>>(f. 17 v°)

三つの政体を比較し、最後にプラトン、アリストテレスらの権威を援用して、王政を正当化するのである。このような例の付加は、クリクトウェウスの論を大きく変更するものではないが、論拠を提出し、論証を補強しているとは言えるだろう。

次に第８章を検討しよう。クリクトウェウスの書では第Ⅷ章は、パラグラフの始まりを示すと思われる記号に従って分割すれば、三つの部分からなり、次のように構成されていると考えられる。王は高慢を避けるべきとの主張を先ず掲げ、王も人間の条件を避け得ない、それゆえ王は抑制すべしとし、強き者を低くし卑しきものを高くする神が、尊大のために滅ぼした王の例を挙げる。次に運は変り易いとして、聖書や古代からこうした運命の変転にあった王の例を示す。最後に王の状況が不安定であることを、セネカの劇の詩句を援用して述べたのち、ウァレリウス・マクシムスによるダーモクレースの剣のエピソードで締めくくる。

ボエスチュオーも大枠ではこの構成に従っているように感じられ、同じようにダーモクレースの剣の挿話で終る。しかし三つの大きな加筆があり、この章はまずは量的に増加している。その三つの大きな加筆の内、第一のものは単に量に関わるだけではない。これは論冒頭の、王は高慢を避けるべしとの主張のすぐ後に挿入された加筆で、ボエスチュオーは次のように言ってこの部分を始める。

<< Mais afin mieux desraciner ceste maladie, qui est comme vn ver qui nous ronge incessamment, il nous est requis de considerer que c'est que de l'homme, & a combien de miseres & calamitez nostre miserable vie est subiecte. >>(f. 71 r°)

クリクトウェウスは君主の場合を問題にして、王とてもその他の者と人間たる条件において変ることは無いとして論を進める。一方、ボエスチュオーは、この文に示されたように、まずは「人間」の悲惨、「私たちの悲惨な生」の状態を示すことから論を起す。そうしてギリシアのヘラクレイトス、デモクリトスらの哲学者、聖書のヨブ、エレミアなどの例を引いて、人間が生まれながらに悲惨であることを示し、第二の生での幸福を願わざるを得ないことを、古代ギリシアの詩句やパウロなどの聖書の権威により論ずる。この加筆はギリシアの詩人の詩句のフランス語訳も含み、第８章３４頁のうちの１６頁近くを占め、その量からしてもボエスチュオーがこの部分を重視していることが見て取れよう。この人間の悲惨の主題は、ボエスチュオーの『世界劇場』で詳細に展開されるもので、ここにその萌芽が認められる。しかしこの部分は、これまでの付加と異なり、単に例を殖やしただけのものではない。クリクトウェウスの章では、出だしの主張の後、まとめの部分があり、すぐに神が滅ぼした王の例が来ていた。ボエスチュオーは、そうした王の例を述べる前に付加されたこの部分を挿入した。こうすることによって、クリクトウェウスの論では一つのパラグラフにまとめられていたものが、二つの部分、あるいは一つの部分の前半になっていると考えられる。即ちこの例の付加によりボエスチュオーはこの章の構成を変更していると思われる。

さらに今指摘した部分の移行の部分にあるまとめの文にも興味深いものが見られる。クリクトウェウスは最初の主張と次の例を、以下の文で繋ぐ。

<<qua se semper hominem esse meminerit / & caeterorum more formatum ex limo terrae / quemadomodum de seipso ingenue profitetur Salomon. se itidem mortale corpus genere / vt reliqui homines : & paulo post in cinerem /putredinem & vermes resoluendum / vt & ij quibus dominatur. Nulla enim naturae conditione ab illis disprepat : eadem omnino mortalitatis sors est & regi & subditis. Vtrique ijsdem naturae incommodis / fami / frigori / morbis / varijs casibus / & denique morti : sunt obnoxij. Coaequalium naturae gradu hominum princeps est rex : immo & conseruorum. Vnus enim est omnium dominus : rex omnium & creator. cuius contemplatione : fastum animi studeat reprimere rex modestus / ob sublimitatem solij regalis obrepere solitum. secum reputans se donum & indicem in coelis habere : >> (f. 29 r°- v°)[7]

一方ボエスチュオーは人間の悲惨の例を次のようにして結ぶ。

<< Ceste philosophie sur la misere de la vie humaine ainsi deduyte par nous, n'est point inutile : car c'est vn mirouer, ou exemplaire pour abaisser les princes, & autres grands Seigneurs, lors qu'ilz se sentiront chatouillez de vaine gloire : car considerant la commune origine de tous : la premiere masse, dont nous sommes sortis, comme nous sommes maintenuz de pareilz elemens, rachetez d'vn mesme sang, ayant vn commun ennemy satan, nouris de pareilz sacremens, tous incorporez en vne Eglise, bataillans tous soubz vn mesme chef, qui est Iesus Christ, esperant vn mesme loyer, tous subjetz aux vices & passions, egaux à la mort, ilz iugeront lors qu'ilz ne different en rien des plus abiectes creatures, fors en vne dignité caduque et transitoire, qui s'esuanouyst comme fumée. >>(f.77 v°)

クリクトウェウスによれば、人間は泥から作られ、死すべきもので、病気などの自然の条件に従い、王とてもそれを免れない。ボエスチュオーもこうした人間の条件、人間の悲惨は勿論認めており、むしろそれを強調していた。しかし「全員の共通の源」はこうした人間の条件に留まらない。キリスト教徒として同じ信仰を持つことも指摘している。こうしたクリクトウェウスと異なるところにこそ、ボエスチュオーの考えを探すべきであろうが、なかでも「同様の秘跡に養われ」と「一つの教会に組み込まれ」という表現には、注意すべきである。ボエスチュオーの宗教思想に関しては、改革派に近いのではないかとの指摘もあるが、決定的なものではない。今の二つの表現からは、近接した秘跡の考えを持つ宗派であっても、一つの教会に統合されうる、と理解される可能性もあろう。しかしこのテーマについては、死後出版の書も含めて、ボエスチュ

[7]「そうして自分が人間であることを常に思い出すべきである。ソロモンが自身について立派に認めたように、他の者たち同様土の泥から作られていることを。同じく、他の人間と同様に、死すべき肉体を持つことを。そしてしばらくすれば、支配される者と同様に、灰、腐敗、蛆虫に解体されることを。すなわち自然の条件の何もその者たちと異ならない。自然は、飢え、寒さ、病、さまざまな不運、最後に死という同じ不都合を両者に押し付けた。王は自然の歩みにおいて同年代の者の先頭である。それどころか仲間の奴隷の先頭である。確かにただ一人のすべての主、すべてのものの王で創造者、がおられる。慎み深い王はそれを考えて精神の尊大を抑制することを、高潔のために王座のいつもの状態に近づくことを学ぶべきだ。」

オーの著作全体を考慮に入れて考察されるべきであろう。

このように第８章における加筆は、例を増やして論を強調するに留まらず、章の構成やボエスチュオーの考えにも関係している。

次に、ボエスチュオーが自分の「発想」だと言う章の検討に入ろう。まずは第 12 章の「平和と戦争の論」について見ていく。この論は、君臣間の相互愛を説く、つぎのような出だしで始まる。

<<Car il n'y a propugnacles, mutations, ou defenses qui rendent le Prince plus fort & redouté que la charité, paix & dilection de ses vassaux : >>(f. 108 v°)

この文は以下のクリクトウェウスの論を踏まえていよう。

<<Neque densum stipatorum agmen / latus regis ambientiumi: neque mille armorum genera / neque valida propugnacula / vsque adeo tutum illi praestant munimentum : vt charitas & dilectio ciuium in regem. >>(f. 56 r°)[8]

しかしボエスチュオーはすぐにクリクトウェウスの論を離れ、平和が人間の幸せの源だとして、次のように述べる。

<<Par son ayde les champs sont cultiuez, les campagnes sont tapissées & diaprées de leur verdeur, les animaux se repaissent, les Citez sont edifiées, les choses ruynées sont restaurées, les antiques sont augmentées, les loix sont en vigueur, les Republiques florissent, la religion est maintenuë, l'equité est gardée, l'humanité entretenuë, les mecaniques s'exercent, les pauures viuent à leur ayse, les riches prosperent, les disciplines & sciences sont enseignées auec liberté, la ieunesse aprend la vertu, les vieillards se reposent, les vierges sont plus hereusement mariées, >> (f. 109r°)

この文は実はエラスムスの *Adagiorum Chiliades*『格言集』にある <<Dulce bellum inexpertis>>「戦争は体験しない者にこそ快し」の以下の部分をほぼ引き写したものである。

<<coluntur agri, vernant horti, pascuntur laetae pecudes, aedificantur villae, extruuntur oppida, instaurantur collapsa, ornantur et augentur extructa, crescunt opes, aluntur voluptates, vigent leges, floret reipublicae disciplina, feruet religio, valet aequitas, pollet humanitas, calent artes opificum, vberior est quaestus pauperum, splendidior opulentia diuitum. Efflorescunt honestissimarum disciplinarum studia, eruditur iuunentus, tranquillo fruuntur ocio senes, bonis auspiciis nubunt virgines, >>[9]

---

[8]「王の傍らを囲む密な護衛も、千の種類の武器も、有効な砦も、全く安全な堡塁も、王国の市民の愛と慈愛ほど王には役立たない。」

[9] *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, O.2, T.7, North-Holland Publishing Company, 1999, p.23.「畑は耕され、田野は緑なし、動物は太り、田舎の館は築かれ、都市が建設され、毀たれたものは再建され、建築されたものは豊かに飾られ、建造物は増加し、楽しみは増加し、法は力があり、政治秩序は花開き、信仰心は燃えたち、衡平は優勢で、人間らしさが重きをなし、手工業は盛んであり、貧しい者はより豊か

だがエラスムスからの引き写しは、この格言からに留まらない。先の引用の後に置かれた、動物も仲間を持つことを述べる次の二つを文を比べてみれば、同じくエラスムスの *Querela Pacis*『平和の訴え』の中の文を翻案したものであることは一目瞭然である。

<<lesquelz[=animaux] priuez de l'vsage de raison viuent egallement en paix et & concorde les vns auec les autres. Qu'il ne soit vray, les Elephans cherchent les Elephans, les Grues & Cigoignes ont quelque confederation & alliance, par laquelle elles se soulagent & aydent, les fourmis & mouches à miel ont vne forme de Republique & police entre elles, mesmes les plus fiers & cruelz animaux de la terre, quelque brutalité qu'ilz ayent, si ne sont ilz point si desnaturez qu'ilz se poursuyent les vns les autres. Le Sanglier n'acroche le sanglier : Le Lyon ne desmembre le Lyon : Le Dragon n'exerce sa raige contre le Dragon : La Vipere ne poursuyt le Vipere, mesmes la concorde des Loups est d'antiquité receuë en prouerbe :>> (f.109 v°)

<<Animantia rationis expertia in suo quaeque genere ciuiliter concorditerque degunt. Armentatiom viuunt elephanti, gregatim pascuntur sues et oues, turmatim volant grues et graculi, habent sua comitia ciconiae, pictatis etiam magistrae, mutuis officiis sese tuentur delphini. Nota est formicarum et apum inter ipsas concors politia. [...] Quid quod inter immanissimas etiam feras conuenit? *Leonum inter* ipsos *feritas non domicat*. Aper in aprum non vibrat dentem fulmineum. Lynci cum lynce pax est. Draco non saeuit in draconem. Luporum concordiam etiam prouerbia nobilitarunt. >>[10]

こうしてボエスチュオーはこの平和論の多くの部分を、エラスムスの二つの作品から題材をとり、組立てている。両者の対応を、紙幅の制限もあり一つ一つ指摘することは今はできないが、ボエスチュオーの論の展開は、ほぼ『平和の訴え』に従っており、そこに格言からの文を例示として加えていると考えられる。しかし、完全にエラスムスを踏襲するわけではない。こうした事情を以下にやや詳しく見てみよう。

に儲けを得て、富める者は富裕となる。この上なく立派な学芸が発展し、若者は教えを受け、老人は静かに休息を過ごし、娘はよりよい兆しで結婚する」Cf.「戦争は体験しない者にこそ快し」月村辰雄訳　二宮敬　『人類の知的遺産 23　エラスムス』、講談社、1984、311 頁

[10] *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, O.4, T.2, North-Holland Publishing Company, 1977, p.62.「ものの道理を弁えない動物たちは、めいめいその種族に従って仲よく和合のうちに暮らしています。象は群棲し、豚と羊は分かれて草を喰んでいます。鶴もかけすも群をなして飛び、恭順と善意の師でもあるこうのとりは仲間同士で会議を催します。いるかはいるかでお互いに護り合い、力をかし合っています。蟻と蜂の国の見事な共同生活はあまねく知れわたっています。(. . .) 自分に惹きつけるというこの能力は、猛獣の間にもはっきり現れています。兇猛な獅子といえども断じて仲間同士で相闘うことはありませんし、猪は他の猪にその研ぎ立てた恐ろしい牙をむくことは断じてしないものです。山猫同士は平和に棲んでおり、竜が竜に対して猛り狂うことはないのです。狼の仲間の親しさはまことに有名な話になっています。」『平和の訴え』箕輪三郎訳、岩波書店、1961、19 頁。

『平和の訴え』はルネサンス期に盛んであったdeclamatio練習答弁のジャンルに属し、その構成はあまり明確とは言えないが、おおよそ次にように分析することができよう。

平和が善きものの源泉であるとの序に続き、本論ではまず自然における和合が述べられる。星辰から、体の器官、肉体と魂、動物、植物、岩石、さらには悪魔に至るまで、自然は和合を与えているとの主張の後に、理性と言語、人間性を供えた人間の本性的和合は人間同士の結びつき、 商業、社会、夫婦や親子関係にまで及ぶ。

しかしそれにも拘わらず、神殿、都会、宮殿、学者、聖職者、修道院、夫婦間、理性と感情との間にも不和が存在する。

これに対して、キリスト教は平和を教えており、それはイエスの生涯、誕生以前の予言、誕生、成人、最後の晩餐での教えにおいて明らかで、聖餐、君主の奉仕、聖書、教会などに関する教えでも平和を勧めている。

けれども当代において戦争が遺憾ながら行われており、エラスムスはその原因を述べた後、残虐な様相に言及する。

そして、君主の態度、主権者の安定、領地の協定、王位継承などについてやや具体的に平和を保つための提案を提出する。

戦争を完全に認めない訳ではないと言いながらも、平和と戦争の得失を考慮して、平和を贖うべきとの主張に至る。

君主、司祭、キリスト教徒、それぞれが和合のために務めるべきだとして本論を終え、自然の感性、人間性、キリスト、平和のもたらす利益、戦争の災禍、すべてが和合を呼びかけるとして、フランソワ一世、カール五世、マクシミリアン、ヘンリー八世らの当代の君主に平和を訴えて、論を結ぶ。

ボエスチュオーは出だしの、君臣間での和合こそ、クリクトウェウスを踏まえるが、その後の展開では、このエラスムスの構成に先ずは倣う。即ち平和の勧めとして、自然界の和合を述べ、人間界の和合へと繋げたあと、不和の存在を指摘する。次にキリスト教世界に話を及ぼし、そこでの和合と戦争の姿を語る。ここまではエラスムスの『平和の訴え』の構成に従っているが、マルクス･アウレリウス帝が勝利した後、ローマでの凱旋式で、勝利の空しさを嘆くエピソード（f. 122 r°-v°）からは、エラスムスを離れる。このエピソードは、ミシェル・シモナンが指摘するように、Guevaraゲヴァラの『君主の時計』のフランス語訳 *L'horloge des princes* から取られたもので、後にほぼそのままの形で、『世界劇場』に再現される[11]。この後ボエスチュオーは戦争のもたらす二つの災厄、飢饉とペストに触れ、不和の元や戦争の原因を述べ、偶像崇拝故の懲罰としての戦争を旧約聖書の例を引き詳述する。そして最後にエラスムスの論に倣い、聖職者、一般人、君主の平和への務めを説いて締め括る。

このようにボエスチューは論のかなりの部分は『平和の訴え』の構成を引き継ぎ、そこに「戦争は経験しないものにこそ快し」からの例を加えて展開しており、平和の主張として重なる部

---

[11] Michel Simonin, Boaistuau, *Le Théâtre du Monde*, pp.271-272, n.209. エピソードは同書、134 − 135頁にある。

分も多い。しかしエラスムスのように具体的に平和を保つための提案をすることはなく、またこの格言で、トルコ人に対するものまで含めて、戦争を極力忌避しようとするエラスムスの態度とは、一線を画している。それはボエスチュオーが戦争の原因をエラスムスとはかなり異なって捕えているからである。ボエスチュオーは次のように指摘していた。

<< Mais considerons vn peu comme le Seigneur a afligé son peuple par guerres pour les chastier de leurs pechez, speciallement pour le vice d'idolatrie>> (f. 124 v°)

つまり、主は人々の犯した罪、中でも偶像崇拝を犯した罪を懲罰するために戦争で苦しめることがある、というのだ。そしてこの後に、主は慈悲も備えているので、息子に追放されたダヴィデがへりくだることによって王国に戻ったこともあるという例を挙げた後、次のように結論する。

<< & tous les exemples que nous auons deduitz cy deuant, ne tendent à autre fin sinon à exhorter le peuple que toutes les guerres & persecutions qu'il a, ne sont point fortuites, mais qu'elles procedent d'vn secret iugement de Dieu, qui les permet, afin de corriger leurs fautes, ausquelles estant par trop enseueliz, il souffre qu'ilz soient esueillez de leurs delices par le fleau de la guerre qui leur suscite de leurs propres voysins, >> (f. 126 r°)

戦争は神の秘密の判断から発していて、神は人々の過ちを正すために隣人によって引き起こされる戦争を許し、戦争という神の怒りの具現によって、陥っている快楽から人々を目覚めさせる。つまり神の懲罰としての戦争をボエスチュオーは是認しており、この引用文の前に書かれているが、一番の罪は偶像崇拝である。上記引用文からはこのような考えが読み取れ、これをボエスチュオーは『世界劇場』でも繰り返すだろう。

章の検討の最後に、これもボエスチュオーが自分の「発想」だとする第１３章を見よう。クリクトウェウスの論の第ＸⅧ章も情欲に関するものではあるが、『ケリドニウス・チグリヌスの物語』での展開とは異なり、関連はないと考えることができる。ボエスチュオーの書では論は次のように繰り広げられる。まず君主が女性に対して犯す淫乱による害が例を交えて提示され、これを防ぐために結婚が薦められる。しかしすぐに結婚論へと向かわずに、妻の夫への服従が説かれ、その埋め合わせであるかのように次には女性の擁護がなされる。次に結婚の賞讃が来るが、作者は以下のようにしてその理由を説明する。

<< Quant à mon regard, la raison qui m'a induit à recenser queques petites de leurs louanges, mentionnées cy dessus, ne tend à autre fin, qu'à induire les hommes qui se laissent transporter à leurs desirs lubriques, de se marier, veu que c'est le souuerain remede que le Seigneur Dieu a donné à l'homme pour le soulagement de son infirmité : ioint que le mariage est tant necessaire à l'homme, qu'il est seul conseruateur & gardien de nostre estre, lequel Iesuschrist a tant voulu honorer, qu'estant conuié aux noces, il l'enrichit & ennoblit du premier miracle qu'il fit jamais en terre. Quelle chose est plus sainte que le mariage, lequel le souuerain autheur de toutes choses, a ordonné, santctifié & consacré ? >> (f. 133 v°-134 r°)

神が人間（男）に与えた情欲の治療薬、人間（男）を慰め、子孫によって私たちの存在を繋ぐ結婚。ボエスチュオーのこの章での主張はこの部分に尽きているとも言える。ただこれはボエスチュ

オーの「発想」ではない。上掲引用文７行目以下を、次の文と比べてみよう。

<< quid matrimonio honestius, quod ipse Christus honestauit, qui nuptiis vna cum matre, non solum interesse dignatus est, verumetiam nuptiale conuiuium miraculorum suorum primitiis consecrauit ? Quid sanctius, quod ipse rerum parens instituit, adiunxit, sanctificauit, quod ipsa sanxit natura ?>>[12]

ボエスチュオーの文は、多少の省略はあるが、ほぼ文字通りの翻訳であることが容易に認められよう。この文はエラスムスの *Encomivn matrimonii*『結婚礼讃』に含まれる文である。つまりボエスチューまたしてもエラスムスから論を借用している。しかも今回は第１２章のように､借用した論を組立て直すことも殆ど行っていない。今一つ一つの対応を詳説する暇は無いが、先の引用文の後に繰り広げられる説は、省略や付加はあるものの、ほぼエラスムスのこの論を順序どおりに引き継いでいる。従って結論である次の文もエラスムスの文とほぼ重なる。

<<Puis donc que le Seigneur Dieu veult, les loix le commande, l'honnesteté nous y conuie, la Raison nous exhorte, Nature nous induit, necessité nous contraint, les os mesmes & cendres de noz ancestres & parens qui reposent aux sepulchres le requerent, receuons, honorons, & maintenons le mariage auec telle innocence, purité & sincerité de cueur, qu'il ne nous soit vn iour en comdemnatino deuant Dieu iuste iuge de noz œuures. >>(f. 143 r°)

<<quanto aequius est id amicorum lachrymas, patriae pietatem, maiorum charitatem abs te obtinere, ad quod te diuinae pariter et humanae leges hortantur, natura instigat, ratio ducit, honestas allicit, tot commoda inuitant, necessitas etiam ipsa cogit.>> [13]

こうしてボエスチュオーがもうひとつの自分の「発想」とした章も、前半の導入部は除いて、エラスムスの書を引き写したものであり、ここに作者の考えを見いだすことはできない。なお、付言しておけば、エラスムスにおいても、またそれを引き継いだボエスチュオーにおいても、結婚の薦めは男性に関してであり、女性への視点はまったくない。

さてこれまで見てきたボエスチュオーの書、およびその大元となったクリクトウェウスの作品はいずれも『君主の鑑』speculum regis / principis、miroir aux princes というジャンルに属している。柴田平三郎はこのジャンルを定義して、「あるべき理想の君主の姿を鑑（鏡）に映し出してみせる書物たる＜君主の鑑＞は、君主にたいしてかれがどうあるべきか、あるいはどう

---

[12] *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, O.1, T.5, North-Holland Publishing Company, 1975, p.386.「何が結婚よりも立派でしょうか。結婚はキリストご自身が栄誉を与えられ、ある母との結婚式で、参加されることが当然であるだけでなく、結婚式をご自身の奇跡の最初のものとして聖別されたのです。ものごとの創始者ご自身が制定され、つながれ、聖別されたもの、自然自身が制定したものより何がより神聖でしょうか。」

[13] *Ibid.*, p.416.「神の法と同様人間の法が促し、自然が駆り立て、理性が導き、栄誉が誘い、便益全体が勧誘し、必要そのものさえも強いるものを、友人の涙、祖国愛、より大きな愛が君から得るのはどれほどより当然であろうか。」

あるべきでないかを指し示し、そうすることによってこの鏡を覗き込む君主に、君主としての＜手本＞や＜模範＞、＜モデル＞、さらに＜戒め（教訓）＞を与えるものであった」[14] とする。さらにこの解説において柴田は、「アウグスティヌス『神の国』第五巻第二四章の一節から始まる」（144 頁）このジャンルは、「キリスト教的原理に基づ」（149 頁）き、「主題や題材はもっぱら聖書、とりわけ旧約聖書から引き出され」（149 － 150 頁）、「古典古代の異教の教えも用いら」（150 頁）、「統治を司る一個人としての君主の道徳的・人格的なありようの問題にもっぱら焦点が絞られ」（151 頁）、「「範例」(exemplum) 模範とすべき理想の支配者の実例（と同時に、それと反対にそうすべきでない支配者の実例）」（169 頁）を頻繁に用いると、的確にこのジャンルを説明している。

『王の務めについての小品』も『ケリドニウス・チグリヌスの物語』も柴田の指摘するこのジャンルの内容によくあてはまるが、ボエスチュオーの方がジャンル性をより意識しており、クリクトウェウスは <<speculum>> の語を作品で二回しか用いないが、ボエスチュオーは <<mirouer>> の語を八回使用し、プロローグに付加した部分で、良き王は手本となり、暴君は悪しき例として、王の行動を導く永遠の鏡、例として役立つ（sig. a viii r°- v°）、と言明している。ボエスチュオーとクリクトウェウスの書をこの伝統の中で位置づけて論じることは、私たちの力の及ぶことでもなく、また私たちの当面の関心の赴くところでもないので、ここではクリクトウェウスの書と比べて『ケリドニウス・チグリヌスの物語』の特徴と思われること、強調されている点を指摘するに留めたい。

一つはキリスト教社会 respublica christiana の捉え方に関する。両書ともキリスト教社会を前提にしていることは明らかだが、クリクトウェウスはそれが如何なるものかは言及しない。言うまでもないことであったのだろう。一方典拠に付加した部分にはボエスチュオーがキリスト教的統一をどのように考えていたかが窺われる。先に掲げた人間の悲惨を結論付けていた引用と、ほぼ同じ内容のものが、平和論でも再び取り上げられており（sig. 124 r°）、ここでも、イエスの同じ一つの血で贖われ、サタンを敵とし、情念に屈しやすく、等しく死すべき存在である、とされ、<<nourriz de pareilz sacremens>>「同様な秘跡に養われ」と繰り返される。さらに第８章では、マホメットを他の異端と同列において扱っていた[15]。そこで挙げられた異端は三位一体を否定したサベリウス派を初めとして、一六世紀の西欧キリスト教社会では、（セルベトのような極端な主張を掲げるものを除いて）新旧両派ともから、明確に否定された古代の宗派である。このことを、「同様な秘跡」という表現と併せて考察すれば、先に述べたように、ボエスチュオーは、新旧両派を含むキリスト教社会を想定していると考えることは、それほど的外れではないだろう。

さらに、第８章では異端、殊に偶像崇拝に対する、神の厳しい姿勢が強調されていた。今回ふれたエラスムスの論を基にした平和論でもその立場は維持され、ロッテルダムのユマニスト

---

[14] 柴田平三郎、「トマス・アクィナスと西欧における＜君主の鑑＞の伝統」、トマス・アクィナス、『君主の統治について』、岩波書店、2009、143 頁。
[15] 前掲拙論文、10 － 11 頁。

との相違を成していることは、先に見た通りである。

こうした偶像崇拝への敵意、懲罰の考えを、先のキリスト教社会の捕え方と重ね合わせるならば、決定的な分裂、対立を間近に見据えて、いわばトルコ人を共通の敵として、フランス教会の統一を守ろうとする立場を読み取ることもできるかもしれない。

これまで検討してきた通り、『ケリドニウス・チグリヌスの物語』はクリクトウェウスとエラスムスの書を典拠として、そこに他の典拠から引いた多くの例の付加することによって書かれている。従ってボエスチュオーの書き方の特徴は、主にこうした例の付加の仕方に求めるべきである。

先の解説で柴田は「「例」を叙述の中で引用するということは自分の論旨を読み手にいっそう説得的に示そうとする修辞学的方法の一つ」（171 頁）であると正当に概説していたが、私たちはボエスチュオーの例の用い方について、より具体的に次のような特徴を指摘しよう。

第一に言えるのは、こうした例の付加は古典的教養の誇示であるといえることだ。すでにクリクトウェウスも聖書からだけではなく、ギリシア、ローマの古典古代の作品から、多くの例を引いており、その中にはウェルギリウスの詩句やセネカの劇からの引用も含まれていた。これにボエスチュオーは多くの例を付加し、更にギリシア語の詩をフランス語訳で提供することまでしている。一六世紀という古典復興の時代にあって、こうした引用は、作者の広い教養を示すものである。

しかしボエスチュオーは例を遠い昔から取り入れるだけではない。<< Maintenant nous proposerons quelques exemples de mesme matiere, qui sont passez soubz nostre temps>> (f. 95 v°) といって始められた例の提示は、同時代のある教皇、教皇シクストゥス四世、画家ラファエロ、イタリアの某伯爵の逸話からなっており、読者にとってより親しみのある同時代のものを採用している。こうした同時代化の試みは、ラファエロの当意即妙で辛辣な返答の卓抜さとも相俟って、説得力を増し、読者の興味を一層引くものとなっている。

例の使用は何よりも主張の論拠となり、説得力を得させるためであるが、中にはこうした目的をはみ出していると思われる場合もある。第１１章で暴君の害を語る際、ボエスチュオーはヘリオガバルスの逸話を例として挙げる。その際この皇帝の悪行を賢者の追放、淫奔な生活、女装趣味、美食や衣服や装備への濫費など細々と述べ、最後に殺された皇帝がテベレ河に投げ捨てられたと締めくくる。この挿話を原著にして６頁（f..103 v°-106 r°）にも渡り繰り広げてみせる。これはもう説得力を増すためというよりは、<<I'ay tant proposé d'exemples de mansuetude de douceur, que i'ay peur d'ennuyer les lecteurs>>(f. 97 r°) と語り手が反省するほど、こうした語ることの楽しみに身を委ね結果であり、そうした魅力に引き摺られたかのような印象を与えるほどである。

さらにこの語りの楽しみは語り手だけに留まらない。ボエスチュオーは、提示する例を、見習い、また反面教師とすべき鑑としてだけではなく、各人が眺める「舞台」theatre としても示していた（sig. aii v°）。theatre の語はこの書で五度出現し、四度は例を眺めるべき舞台を意味

している。しかし 第５章の遵法の例として挙げられたザレウコスの場合は少し事情を異にする。これはクリクトウェウスも挙げている例で、その典拠はウァレウス･マクシムスの『著名言行録』*Facta et Dicta Memorabilia* 第６巻第５章である。ロクレスの王ザレウコスは姦通を厳しく罰する法を制定し、違反者は両目を抉られるとの罰を課すことにした。ところが当の王の息子がその廉で捕えられた。住民は王の善政故に処罰の軽減を望んだが、王は自ら定めた法を遵守することを選んだ。そしてボエスチュオーは典拠とも翻訳元とも異なり、次のようにこの逸話を締めくくる。

<< : mais en fin vaincu par l'importunité & priere du peuple, voulant leur satisfaction en quelque chose, & garder sa loy inuiolable, fit eriger vn theatre, & en leur presence estant montez luy & son filz desssus, auec vne constance inuincible, arracha premier l'vn de ses yeulx, puis incontinent arrache l'vn de ceux de son filz. >> (f. 28 v°)

ペリオド的構文の従属節で読者の期待を高め、最後の効果的な現在形で結末が示されるが、なにより設えれれた舞台で演じられる光景を読者も目の当たりにするかのように感じられるのではないか。ここでは舞台が語りの場面に出現し、劇的な効果が発揮されるように工夫されている。

ボエスチュオーは多くの例を挙げたが、その中には先ほどのヘリオガバルスの暴虐ぶりを語るのもの、夢により殺そうとして我が子を救った部下のアルパルスに自身の子を食べさせたアスチアゲス王の逸話（f. 106r°-107r°）などの残虐な例を含み、また人間の悲惨や戦争の災禍を描くのにも多くの頁を費やしている。こうした例話の性格は、頻出する <<monstre>>, <<miracle>>, <<merveille>> などの語彙とも相俟って、ボオエスチュオーが後の書物で繰り出す悲惨、残酷、驚異への嗜好をすでに垣間見せているとも言えるだろう。

『ケリドニウス・チグリウスの物語』は、クリクトウェウスの作品の翻案を基幹とし、エラスムスの書を接木し、ピエール・ブロンらから引かれた多く例で飾った作品である。いわば多くの布地を再利用して一枚に繋ぎ合わせたパッチワークとも言えよう。しかしこれを単なる剽窃とすべきではない。一六世紀的書き方の一つの型と見なすべきで、その出来栄えの評価は、こうして縫い合わされて出来上がった一つの作品の仕上がり具合によってなされるべきではないだろうか。『ケリドニウス・チグリヌスの物語』が、もとの部分とはまた異なる見事な模様を描き出しているとは必ずしも言えないのではあるが、処女作に後に展開される要素が萌芽的にほとんど含まれていることは確かである。

（2018.12.12）

Étude de Pierre Boaistuau (4)bis
l'Histoire de Chelidonius Tigurinus, sur l'Institution des Princes chrestiens et origine des Royaumes
(suite et fin)

Yoshihiro KAJI

À la suite de notre article précedent, cette fois nous abordons principalement le problème de la composition de *l'Histoire de Chelidonius Tigurinus*, dont la grande partie est, comme l'auteur lui-même l'admet sans nommer la source, la <<traduction>> de *De regis officio opusculum* de Idocus Clichtoueus.

Après l'examen des aspects de la traduction, nous focalisons l'analyse sur le chapitre 12, trait sur la paix et la guerre, que Boaistuau pretend son <<invention>>. En réalité il compose cette partie en empruntant plusieurs passages des deux ouvrages d'Érasme : *Querela pacis* et l'adage << Dulce bellum inexpertis>>. Mais il ne suit pas totalement le pacifisme érasmien. A la fin du chapitre, il consacre assez de lignes pour justifier <<le fleau de la guerre>> comme le châtiment de Dieu. Le chapitre 13 traitant le mariage est aussi basé, en grande partie, sur *Encomium matrimonii* d'Érasme.

Ces recherches nous conduisent à reconnaître, dès sa première œuvre, son procédé de <<patchwork>> par le <<recyclage>> des diverses sources.